

往生伝における紫雲と夢

永田 真 隆

一 はじめに

本稿では往生伝における紫雲と夢の関係について考察する。往生人の臨終における来迎の奇瑞はさまざまに表現されるが、その中でも紫雲と夢との関係性に着目し、表現方法としての夢の重要性を確認していききたい。初めに日本の往生伝と中国の往生伝における紫雲の出現する箇所を取り上げ、それらに何らかの傾向が存在するかを確認した。すると、日本の往生伝の中では紫雲は夢中に確認されるものであるという傾向が見えてくる。ここから私は、紫雲を夢中で見るということに何らかの重要性があったのではないかと考える。中世における夢中体験のもつ重要性は以前より注目されている⁽¹⁾が、この往生伝における事例も中世における夢のもつ重要性を裏付けるものであろう。奇瑞の中でも紫雲は特に高位な奇瑞である。⁽²⁾その紫雲と付随的に夢が語られると言うことはどうことであろうか。中世における夢の位置付けをこのような

観点からも論証していく。

二 日本の往生伝における紫雲

日本の往生伝における紫雲の用例について見ていききたい。⁽³⁾『拾遺往生伝』における紫雲の用例は、

「沙門清仁伝」

其ノ夜夢ミラク、西〔方〕自リ金棺与紫雲ト飛ヒ来リテ、
「尋寂法師伝」

此ノ時郷ノ人一両夢ミラク、紫雲天ニ聳キ、香氣室ニ薫ス。
「鞍馬寺根本別当峰延伝」

此ノ時夢ミラク、一リノ童子有リ、年十五、六可ナリ。（中略）
堂ノ庭ニ出テテ望ムニ、北〔此〕山ニ紫雲ヲ見タリ。

「伊予国法樂寺一老尼伝」

同シキ上人夢ミラク、紫雲飄飄トナヒキテ、

と四例を数える。実に『拾遺往生伝』においては記述されるすべての紫雲は夢中で感ずるものとされる。このような、夢において往生の奇瑞たる紫雲を見る場面はこの後に成立する

往生伝中においても頻出する。↓四伝中四伝（以下同様に「○伝中○伝」と「紫雲が出現する伝」中の「夢に関連する伝」）。

『後拾遺往生伝』における紫雲の用例は、

「入道二品親王伝」

遙二天隅ヲ見ルニ、「紫雲」西ニ聳キ、青天秋幽ナリ。」

「守源伝」

其ノ時醍醐寺ノ住僧夢ミラク、清水寺ノ北峰ニ、青天高く晴レ、紫雲遠ク聳ク。

「良源伝」

禪房ノ廊ノ前ノ橋ノ樹ノ上ニ紫雲有リ。

「俊房伝」

堂上ヲ見ルニ、黒雲ノ「之」中ニ、白光再ヒ現ハル。（中略）定テ知リヌ、此ノ黒煙ハ「者」、是レ紫雲ノ「之」瑞カ「歟」ト。

「安部俊清伝」

後日僕從夢ミラク、其ノ人紫雲ニ乗リ、西ヲ指シ飛ヒ行ケリ。

「寂禅伝」

又性円同法夢ミラク、聖人ノ住房西ニ去ルコト十余歩、紫雲虹ノ如ク、伎楽室ニ満ツ。

と六例を数える。「入道二品親王伝」、「良源伝」、「俊房伝」では夢とは関連しない。しかしながら「俊房伝」における紫雲は黒雲と判別が出来ていない点に注目したい。紫雲が正しく紫雲と断定できなかったのはこれが夢で見たものではないからではなからうか。↓六伝中三伝。

一方、『三外往生伝』における紫雲の用例は、

往生伝における紫雲と夢（永田）

「薩摩国一沙門伝」

其ノ日紫雲漢ニ聳キ、西ヲ指シテ「兮」飛ヘリ。

「二品法親王伝」

晩二西ノ漢ヲ望ムニ、遙ニ紫雲有リ。

「永助伝」

或イハ紫雲ノ「之」瑞ヲ見ル。

「源俊房伝」

念仏退カ不、紫雲聳キ来リ、瑞光室ヲ照ス。

「江州志賀郡満山麓一女人伝」

紫雲屋上ニ聳ケリ「矣」。其ノ時音楽ヲ聞ク者八人ナリ。

と五例を数え、日本の他の往生伝と比べると紫雲と夢の関係性が薄いといえる。⁽⁴⁾しかし紫雲ではないにしろ「永覚伝」には、

天承元年ノ冬夢ミラク、観音綵雲ニ乗リテ「而」西方自リ来レリ。

と夢と雲の関係が一応は確認される。↓六伝中一伝。

『本朝新修往生伝』における紫雲の用例は、

「武元伝」

或ル者夢ミラク、紫雲西山ニ覆ヒ、

「藤原宗貞伝」

是レヨリ先夢ヲ語りテ曰ハク、我カ家ノ庭ノ上ニ紫雲忽チニ覆ヒ、瑠璃地ト為リ、金銀林ト為ル。

「佐伯成貞伝」

後日僕從夢ミラク、紫雲其ノ墓所ニ覆ヘリ「矣」トミル。

と三例を数え、再び夢と紫雲が関係して語られる。↓三伝中三伝。

最後に、日本初の往生伝である慶滋保胤による『日本往生極楽記』（以下『極楽記』）はどうだろうか。これについても紫雲の用例を見ていくと、

「円仁伝」

生ルルニ紫雲ノ「之」瑞有り。

「増命伝」

今夜金光忽チニ照シ、紫雲自ラ聳キ、音楽空ニ遍ク、

と二例の紫雲の記述がなされるが、ここでは紫雲は「夢」とは関連しない。↓二伝中〇伝。

このように『極楽記』を除く日本の往生伝においては「夢」と「紫雲」が並立して語られる。さて『極楽記』はその序文から、迦才『浄土論』の多大な影響下にあったことがわかる。『極楽記』は中国の往生伝を模して作られたわけであるが、中国においては紫雲はどのような条件下で描写されるのだろうか。次節で見ていく。

三 中国の往生伝における紫雲

中国の文献、ここでは特に高僧伝と往生伝における紫雲の用例について見ていくと、『統高僧伝』『釋慧重伝』『宋高僧伝』『釋智佺伝』『釋弘忍伝』『瑞応刪伝』『綽禪師伝』『新修往生伝』『釈道綽伝』『浄土聖賢録』『智深伝』『西舫彙征』『倪道者伝』などに紫雲の記述がなされ、中国において「紫雲」

という語はしばしば確認されるといえる。しかしここでは日本において見られるように「夢」が特段、紫雲登場の条件としての関わるということはない。これは如何なる理由によるものであろうか。次節で詳しく考えたい。また翻っておもみるに『極楽記』において紫雲と夢の関連する傾向が見いだせなかった原因は、この中国における往生伝の紫雲と夢の関連性の無さによるものに他ならない。

四 夢における体験

夢中において不思議な経験をするという表現は日本と中国に共通して見られる。古くから夢は靈的な意味を持ちそこでの体験が重要な意味を持つものとされてきたのである。しかし日本の中世においては中国に見られる夢への関心とは少し意味合いの違うものがあつたのではないかと考えられる。つまり中国における夢は、しばしば現実と混同する日本のそれとは違い、あくまでも靈証にすぎず、なんらかの前兆としての意味合いが強い。日本における夢の特性に関して、たとえば河東仁氏は日本の往生伝の夢について「仏教的色彩をおびているとはいえ、夢を聖なる次元との通信装置とみなす原々夢信仰に連なる」ものとする。つまり『古事記』『日本書紀』に語られるような日本に古代からある夢に対するに外的現実との近似的視点が中国におけるものとは違った独自性を持

ち、深く関係してくるのである。なるほど、往生伝は来迎の奇瑞により往生の確定を証明するが、それは中国においては現実に見るところの紫雲や光明でなければならぬ。しかしながら日本では夢の中での出来事さえも往生を確定するような真実として捉えられる。むしろ夢であるが故により確からしいものであるととらえることもある。このような中で河東仁氏は往生夢について「称名念仏による易行化が進む中、往生を確証するものとして臨終時における瑞雲や芳香の出現以上に重視され」、「往生をめぐる最大の確証となる」とする。

前節で述べた、紫雲と夢が関係するという傾向は日本の往生伝でのみ確認される事象であり中国の往生伝では確認されないということ、さらに言えば、紫雲という比較的上位の来迎表現が日本では夢のなかでのみ語られるということは、前述のような日本の中世における夢の位置付けを裏付けるものの一つであると言えるだろう。

五 小結

本稿において結論をつけるとすれば以下のようなだろう。

一、日本の往生伝において紫雲は夢のなかで語られる傾向が強い。しかし中国においてはこの傾向は見られない。
 一、夢の中で語られることは日本の中世においては特に重要な意味を持っていた。

往生伝における紫雲と夢（永田）

一、ここから、紫雲は特別に重要な奇瑞であると位置づけることが出来る。またこれは紫雲が語られる往生伝の主人公が特別な人物であることから傍証できる。さらにいうと、夢のもつ意味が中国と日本では変質していることが窺える。

- 1 玉山成元「中世浄土宗教団と夢」（『日本仏教史学』十六所収）。その他に河東仁『日本の夢信仰』などにも詳しい。本稿第四節「夢における体験」では河東氏の言を引用している。
- 2 拙稿「中国往生伝における来迎描写の変遷」（『佛教大学大学院紀要』三六所収）参照。

- 3 国文学研究資料館編『往生伝集 訓読・解題・索引篇』（『往生伝集』と略称）臨川書店刊によった。頁数省略。

- 4 この傾向は後述する『極楽記』のそれと同様。『極楽記』と『三外往生伝』は序の書式が酷似するとの指摘がある。（『往生伝研究序説』二〇三頁）つまり、紫雲と夢の関連性の欠如もなんらかの意図があつてなされたのではとの推測ができる。

〈キーワード〉 往生伝、紫雲、夢、来迎

（佛教大学大学院）